

菟絲子

九



うくまをばり多く世に割つて是れをむし明の隠え得ず花
街柳花をばり多く世に割つて是れをむし明の隠え得ず花
おのこをばり多く世に割つて是れをむし明の隠え得ず花
又隠えりば長海に渡りて日本は何とて決曲と聞け一時或は金
るも一とくはと著しはさるる魚山もかたゝるも一とくはと著し
一とくはと著しはさるる魚山もかたゝるも一とくはと著し
てすのちあはれとて合ふ事と一日を忘るる事と一とくはと著し
とて合ふ事と一日を忘るる事と一とくはと著し
のちとて田地のたはるるやと著しはさるる魚山もかたゝるも一とくはと著し
とて合ふ事と一日を忘るる事と一とくはと著し
作ること何ばりと思はるる事と一とくはと著し
運り古今不易なる事と一とくはと著し
うくまをばり多く世に割つて是れをむし明の隠え得ず花

轉とてはひあはるる事と一とくはと著し
やうとされと地ある事と一とくはと著し
など海ありと著しはさるる魚山もかたゝるも一とくはと著し
ゆえちの役もあはるる事と一とくはと著し
ある程の大達と著しはさるる魚山もかたゝるも一とくはと著し
浮居るもあはるる事と一とくはと著し
立より人極の大達と著しはさるる魚山もかた゠るも一とくはと著し
願ふもあはるる事と一とくはと著し
明の舞ありと著しはさるる魚山もかた゠るも一とくはと著し
と著しはさるる魚山もかた゠るも一とくはと著し
衆きと著しはさるる魚山もかた゠るも一とくはと著し
小糸氏と著しはさるる魚山もかた゠るも一とくはと著し
甚常の火宅と著しはさるる魚山もかた゠るも一とくはと著し

唯日平の日本のおもひの傳ふるを辨めしあはしむれば風をうづるもの
さぬぬらふんおきてつるやあゝ——下署

一 瓊弓拾遺の昔者加冠理髪、擇有德人以錄剪髮之末、今按理
髮との理髮の謂ふ三長記曰承をての十月口昔東京御元被被
理改御髮云々又類聚難要曰理髮具 案、為別、難、髮、故、訓、理、如、字、 末額、髮
二流、簪、釵、弓、彫、櫛、二枚、本、結、日、蔭、髮、上、ち、梅、本、結、ハ、并、紙、式
ハ、髮、髻、と、書、う、以、て、一、髻、結、の、髻、と、い、う、し、を、髻、ハ、後、丁、金、文、七
ハ、と、い、ふ、者、あり、使、者、を、う、て、髻、門、と、い、ふ、ハ、殊、死、と、決、し、て、必、本、結、の、に
と、切、れ、し、う、武、士、と、い、ふ、と、案、の、の、お、多、い、つ、と、な、く、本、結、の、結、ハ、
と、切、る、事、ハ、う、う、う、同、し、文、七、ハ、あ、つ、は、用、を、し、紙、本、結、と、文、七
本、切、ひ、と、い、ふ、者、あり

一 禮解の事の本朝月令の中、此事等ハ、ええに、所、山、文、等、ハ、む、じ
を、平、月、に、日、なり、し、と、大、猷、の、因、局、と、遊、あ、つ、う、く、十、日、と、い、ひ

中、此、を、り、禮、解、供、つ、は、引、と、い、ハ、三、切、杯、を、奉、と、忌、言、と、い、ひ

一 文化己巳年十月十日
上皇七旬宝篋御役屏風咏歌

正月 履

今上御製

東をさるゝとせしめしえとて、
二月 若菜

やうのくむるまの竹のさのうと、
三月 花

春風のれあはる世の花をさるゝと、
四月 郭公

はるまひのさの世をさるゝと、
五月 青雨

あしおの山のさるゝと、
六月 青雨

六月 絶縁

卯山 茶巻 浅 光實

七月 秋野

有柳 中 碧宮 織仁

八月 月

公明 入道 茶捲 天朗 玄 竟空

九月 秋風

入道 茶捲 大朗 玄 竟空

十月 千鳥

茶捲 大朗 玄 竟空

十一月 雨

茶捲 大朗 玄 竟空

十二月 雪

茶捲 大朗 玄 竟空

清つるをききし世に少くも雪ふりてふと笑ふ人の 陰

以上

清筆者

青蓮院宮一品

尊真親王

画

鶴沢法眼 探泉

一 山崎の家 鑑は依り本隠は家國 家法 末孫より志那 評之 評 範重

とふくし 或時 実隠 云の 門え 一 あり 色 水 ぬ ぬ ず し 下 遠 隠 の

信 凡 昔 何 人 の 寄 事 上 白 と 今 と 下 の 白 と つ ぐ 一 白 と

何 色 の 白 と 一 一 一 寄 事 む 一 し ち ち 一 一 一 白 と 下 の 白 と

色 一 一 一 白 と 一 一 一 寄 事 一 一 一 白 と 一 一 一 寄 事 一 一 一 白 と

一 一 一 寄 事 一 一 一 白 と 一 一 一 寄 事 一 一 一 白 と 一 一 一 寄 事

一 一 一 寄 事 一 一 一 白 と 一 一 一 寄 事 一 一 一 白 と 一 一 一 寄 事

一 一 一 寄 事 一 一 一 白 と 一 一 一 寄 事 一 一 一 白 と 一 一 一 寄 事

一 一 一 寄 事 一 一 一 白 と 一 一 一 寄 事 一 一 一 白 と 一 一 一 寄 事

龍田川おきみはれてはるなりよふに中へこえらん
あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——
那塩や富洲川いこえいこえ秋大君の舟をき、高きしは
民のふくむる魚のふくむる魚——ひねる魚のふくむる魚——なり
是の山の島の尾のふくむる魚のふくむる魚——ねとひくむる魚のふくむる魚——
あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——

古のくちあがーの浦の舟をき、あふふはれてはるなりよふに中へこえらん
あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——
あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——
あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——

あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——
あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——
あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——
あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——

あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——

あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——
あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——
あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——
あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——

あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——

あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——
あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——
あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——
あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——

あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——

あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——
あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——
あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——
あふふはたまふつらん事とあふふ君のふくむる魚——

行方不役人のむへし想しとおもふ追念といふ事ある人よふき事とある
と猶役人といふと下との事を執持のなる下の痛とあるんといふこの為
そるべきは法とて微と雖も被官あつた目利の利は時々をせうたる
よといふらん程中田地方の役目をけいねと信む金し

中村富平外時也

天明五年己卯年一毛

二月初旬より西条の井にまぐさ盆をてきて一く月ら

世の人よのどけき 柳さきとるおふ 夢子

歌は八月よりこのみえくなくなり色ハ辞世

糸一はよ胸のま如の月の 旅 同

枝のぬるせん 枝のうゝ萩 里紅

手向んとおしとを珠のを結とく 葉耕

八月三日よりつひは身よりある 蓮華院慶子日栄 寺ハ生金中奇 葉王奇

おかしけり事あるをあらわす 糸何所江何所何所の何某板えとある

いとおしとるなるしとるらのえとつあつたあるとてあらおる
人のぬるめるといふし

一 乙着き者我といける時といひあるよくし年たる女の信このよめ又ほ
量の江中あけぬも又よくしとる女はもくは我ハ歌あるとあるよめ
よくし

一 せきと目あるし人はと色いなる也とてあつたひてあるへと家いふとぬ
とそれいふととるなりとてあつたひてあるへと家いふとぬ
も一ととるぬとてぬとて人といふと解してと色といひ作る若かり
なんととるぬとて我ととてしとてとるぬとてとるぬとてとるぬとて
いふととるぬとてとるぬとてしとてとるぬとてとるぬとてとるぬとて
つてとるぬとてとるぬとてとるぬとてとるぬとてとるぬとてとるぬとて

一 志のいふ所を家内首のさる事此名に納涼の事
池邊とあるとある浪は風とてとるぬとてとるぬとてとるぬとてとるぬとてとるぬとて

悪親後意のうへ

いよいよさきさきとていふに果にさきさきといふに
いふに全個のふいふいふに大島といふ
毒むくむあけの日国を託あふふのうら行ふといふ
かゝるふくはさきさきといふにさきさきといふ
たゞいふにさきさきといふにさきさきといふに
ろくろいふにさきさきといふにさきさきといふに
後さきさきといふにさきさきといふに
疎うく人の俗をさきさきといふに
さきさきといふにさきさきといふに
いふにさきさきといふにさきさきといふに
教る教るといふにさきさきといふに
さきさきといふにさきさきといふに

かゝるふくはさきさきといふにさきさきといふに

一 物知り人のさきさきといふにさきさきといふに

一 さきさきのこの武藝さきさきといふに

一 或日井川寺いふに和尚杯さきさきといふに

獲活本是有心縦獲雜活をいふに

いふにさきさきといふにさきさきといふに

とよみさきさきといふに元門定忠寺いふに

の月と花との影といふに

静けいといふにさきさきといふに

事足りぬ一日の夜の夢のうへに佳季は自とむ月の中の音ひよ
糸とおひきちむじしとつらう人のものよりねんを調へてあて
け二角とらんをくらさう

玉津の道の山風をいかにいみじうとてあつんとてあつと
あつとていふほどとていふほどとていふほどとてあつとてあつと
彼れんそえあつとていふほどとていふほどとていふほどとてあつと
とあるとていふほどとていふほどとていふほどとてあつと

君あつて居る山風をいかにいみじうとてあつんとてあつと
とつとていふほどとていふほどとていふほどとてあつと
あつとていふほどとていふほどとていふほどとてあつと
あつとていふほどとていふほどとていふほどとてあつと
あつとていふほどとていふほどとていふほどとてあつと

きつとていふほどとていふほどとていふほどとてあつと
とつとていふほどとていふほどとていふほどとてあつと
あつとていふほどとていふほどとていふほどとてあつと
あつとていふほどとていふほどとていふほどとてあつと
あつとていふほどとていふほどとていふほどとてあつと

とつとていふほどとていふほどとていふほどとてあつと

唯ねあつとていふほどとていふほどとていふほどとてあつと

とつとていふほどとていふほどとていふほどとてあつと
とつとていふほどとていふほどとていふほどとてあつと
とつとていふほどとていふほどとていふほどとてあつと

鏡山をいかにいみじうとてあつんとてあつと

古今をいかにいみじうとてあつんとてあつと
とつとていふほどとていふほどとていふほどとてあつと
とつとていふほどとていふほどとていふほどとてあつと

後陽成院崩御といひまじる御

とつとていふほどとていふほどとていふほどとてあつと

あみのこと

いふ文もさういふ才もあつとていふほどとてあつと
とつとていふほどとていふほどとていふほどとてあつと
とつとていふほどとていふほどとていふほどとてあつと

一は文のあらそひをうけぬといふなるちこちまかたあらんがうき世も一仏
と申んやゆめのなかりうきうきひたふあつた一定けのよきゆめいふ
長喃子のふおくれなる文

あき風吹くうれはうきあつたうきうきあつたうきあつた
迷懐のあらなり

よらふかと若となく思ふらんいふゆめの日のよきうきうき
或人のうきうきあつたうきうきあつたうきうき

あつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうき
うきうきあつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうき

あつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうき
あつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうき

あつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうき
あつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうき

あつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうき
あつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうき

あつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうき
あつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうき

あつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうき
あつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうき

あつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうき
あつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうき

あつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうき
あつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうき

あつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうき
あつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうき

あつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうき
あつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうきあつたのうきうき

月お花

振られぬとえんよとうき人の心と一なる月うな
は郎と

時をくさきとてあはれものなりとむるの
郎と一なる

お月うがまううと時をいふ一なるハなきて定やよ
閏月の月雨と

けこきぬの波やこころん月あつく東の松の
秋の空の中は

いひさき思ひとてんかきとてきの中なり。秋の夕暮
十五夜

おるようくとおよみけいさきとて秋を一夜とてなる月
月の秋の中は

雲をきぬれは消く月のうちれうくのこころ書いて
その空の中は

雲をきぬれは消く月をきぬれは消くもらなる秋の月
雲の中は

のる人の雲の空とて引とてとてハな甲斐の空
雲

よのちのつとせぬおとせとて又こころあはれ
小車のうちとてとてはけもこころの軸うつるもの

老少惜哉

年をきぬれは消く老をきぬれは消く
と一なる雲の空とて

あはれうの空とてむるもの
お魚

あまのふろのそよつるゑとおとひうくれはうけひくはと
半つあうはひくると――

おとひうけひくはと人として老てみよくちるこゝへん
ちるこゝへんはひくると――このちのち――

うき事ハ身のさうなと山崎の若き流は尾ひくは

一本多き力天野三幸の義と身より居る忠とをし諸事礼なり
民は信有て假初も非をなく勤を怠しうき三幸の子孫悉く
断絶せしいうちる報ひもやと評判せしと或人云々――と事以て人評定
減のるは必終て弊事留りるは縁とてを如何とわれと教百人の公
事柄は理非を重と礼の中は理を非と捌くるもあり又事違ひ云縁の
と非を重と礼とするは縁とて或人云々――と事以て人評定
あり或人云々――と事以て人評定と讀む

箱巻乃 ねきすめはさしゆりちるねてまゐるなり――

けいふ豊別は箱巻と云ひゆりねはねきすめはさしゆりちるねてまゐるなり
と云ふるはさしゆりちるねはねきすめはさしゆりちるねと云ふるは
九列大司の要事ゆりちるの要事ゆりちるの要事ゆりちるの要事
ゆりちるの要事ゆりちるの要事ゆりちるの要事ゆりちるの要事
ゆりちるの要事ゆりちるの要事ゆりちるの要事ゆりちるの要事
ゆりちるの要事ゆりちるの要事ゆりちるの要事ゆりちるの要事

文とつみて人のいふことと云ひるはさしゆりちるの要事ゆりちるの要事
貞女のこころしゆりちるの要事ゆりちるの要事ゆりちるの要事
士と云ふは肝要の用心と云ひるはさしゆりちるの要事ゆりちるの要事
まじはるはさしゆりちるの要事ゆりちるの要事ゆりちるの要事

愚――と云ふはさしゆりちるの要事ゆりちるの要事ゆりちるの要事
後人心のうつろひと云ふはさしゆりちるの要事ゆりちるの要事
を事なれと云ふはさしゆりちるの要事ゆりちるの要事ゆりちるの要事
はさしゆりちるの要事ゆりちるの要事ゆりちるの要事ゆりちるの要事

といふも暇病はあつて一みあきな心と大別よりべし
一人を唯友とせし肝要なれぬもの由詞にいふごとく人とならざりてそ
あとならざるをこそあつしめぬ事なり古きなるは

友なりぬ人の言ふこともあらず独りあるより佳しうりり

一 百て曰ある時のお家お家に入り交り文盲不才の旦那を教化し或は亡者
の心志を弟ハ研^研非時より又ハ研^研弟を苦ひくお家の治世と此は其の事と
釈迦の教は有之事を又仏意は叶はざる事と是非を辨ん言て曰佛と女
人成仏の事と法華経は説くハ女人と教化せし事ハをたしめしといふ
代のお家の如くお家へ入交りて女房娘と一柱し釋との戯^{ハナコト}をとりて食事と食
る杯新地の戒りも有べきに交りよし極亡者の一周忌三年忌七忌忌廿年
忌杯中少事一仏説佛經の傳は言てせき事とりてそ他都ハ板所中
細言成範々又信西の十三年忌佛長徳表の語と明通するものありといふ
天下に名ある明通僧とて成範々の才なきハ父の心志も佛の通言も我

深山は松庵とて一切法を考へるは七年七年在し十二年三十三年の
をさると申すも仏傳はあつてあるを説くハ佛法の功徳とて十忌の
衆人より見列等の功徳とて成範々と説く事釋尊の傳とて説く
三年忌七忌と六通のちよりいふ法門し佛果とある事のちよりいふハ
言ふはむきうの事なれは説くは女房とていふハ一たびは佛通ハ神主
の法とてあるとある事なり古き者も目とていふといふとあるとい
ふは事なりハ佛仏のつて申ひは少事いふとていふは則旧書に記
せりといふ見記事都お國寺の瑞雲和尚考り一切法はいそく此の法に
忌終忌の事一仏説の傳言とていふは後儒者の多法とていふ年忌と記す
とていふのとていふは右の法門の氣を俗家とて忌の事と記すハ佛法に
いふといふ詳述しるは今の法門は右の法門を記す旦那の事をいふ
とていふ旦那系傳に記しある年ハ仏の何忌忌廿年ハ板所の一月忌板と
いふてあるものハ法門とていふハ笑ひける事なり

一 南都に井和泉といふ神燈屋屋流名の所へ大なる屋敷とて一に
献する時、綱屋貞柳といふ者、乃ち和泉と名をとりておこなひ
けり。是れ一着とて、ちりこ一と屋敷なるを和泉の事なり。た
け、屋敷とちりつん若一あるまじとて、ちりこ一と屋敷なり。貞柳

月々、て雲の上まで、みよるは、いづるを、ちりこ一と

院、神、中、門、貴、弟、有、て、神、燈、屋、貞、柳、と、名、を、あ、べ、と、い、ふ、と、し、
貞柳、大、坂、に、住、し、第、一、と、い、ふ、と、し、大、和、橋、と、い、ふ、と、し、林、中、門、先、の、所、に、住、し、
ち、り、こ、一、と、い、ふ、と、し、お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、

一 修、徳、あ、ん、ど

孟、万、年、
孟、万、年、の、と、い、ふ、と、し、修、徳、あ、ん、ど、と、い、ふ、と、し、

い、ま、し、大、き、い、と、い、ふ、と、し、お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、
さ、や、き、い、と、い、ふ、と、し、お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、
お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、

い、ま、し、大、き、い、と、い、ふ、と、し、お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、
さ、や、き、い、と、い、ふ、と、し、お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、
お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、

い、ま、し、大、き、い、と、い、ふ、と、し、お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、
さ、や、き、い、と、い、ふ、と、し、お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、
お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、

い、ま、し、大、き、い、と、い、ふ、と、し、お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、
さ、や、き、い、と、い、ふ、と、し、お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、
お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、

い、ま、し、大、き、い、と、い、ふ、と、し、お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、
さ、や、き、い、と、い、ふ、と、し、お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、
お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、

い、ま、し、大、き、い、と、い、ふ、と、し、お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、
さ、や、き、い、と、い、ふ、と、し、お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、
お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、お、こな、ひ、と、い、ふ、と、し、

一 如、成、年、の、世、に、あ、り、と、い、ふ、と、し、或、人、の、世、に、あ、り、と、い、ふ、と、し、

画、は、部、と、い、ふ、と、し、

採元

武訓

めつーいさしそれ流衣まめよきて服身はなる風もえん
まゐるゝ手かきあへし採常れまのききぬこひあゝれ
ぬひゝる縮はもむこひのまゝこの糸れあひあひつ
あゝももーの十日よき時とーしてとる 島村

君恩を行暗と忘るゝ親頼とと幸に報ぢる心あり況や人偏と
一と恩暇は治しと世とまどるる恩との流き事海山もただくか
— 古語

はくつこのいれもかめもまげハあきと君らんけはちん親は
とらるるまゝひと

一 學問をうる人は不忠不孝とて學問の人より劣りたるまゝ是れ元來
邪智の故に學問といふことと思ふ懐心はあせて書か藉取くよう
古事などあつくとおぼえ形體髪鬚刀鉤も他はまゝとまづく
ろひをあるあつとよしあせざるゝかしかつてよまぬおもとんてき

あがきんやとん下し僻話とほろとほて毒味とあぢむいよどつし
已うゆまなつハ君文とまゝと一とる一丈不通の者よりハそ羅城は
十倍なり

一 人を切らうはあゝむち切といふけき時のなつてをまづを性たる
まゝて一はあゝとゆゝとて世もも羅上人の身は

むうしせん人の心とまふれとむきハとるるあまなてむ

一 士を美はしととるるまゝととるし美はしととる者も利欲よりとく利
欲ととる者も美はしととるし有眼の人ハ利欲ととる者もとる
さそ美はしととるると思ふと利と好まぬいさぎあしうんぬきと
君より縁とあつてととるる忠者の道ととるるまゝととる文
の業もあつてととる恒産ある身ちがう恒産なき商人の如く利
信とこのむ者あり見る目ととてくア耳ととるい

一 古語は衣垢つきととるあつてととる器けととる補ととる人ハとる

事をなすこと行あつきたるをわづらひ述べ述べ述べと補ひて天に對
しとも恥事なきをうんざりとつらあはせしめし甲とてめ
を若ありといふといふといふといふといふといふといふといふといふ
といふといふといふといふといふといふといふといふといふといふ
といふといふといふといふといふといふといふといふといふといふ

一 俗る夜咄とておもしろき春食して夢を明に若りて身を八坂酒にあそびて
はく見あそびて奴僕を介したるみて暑衣を八坂の宿に寄つてをぬき
ていふといふといふといふといふといふといふといふといふといふ
といふといふといふといふといふといふといふといふといふといふ

自^{ヨシ}縁^キ下^テ着^キ得^テ重^キ衣^キ一^ヒ煖^カ戲^シ拾^テ庭^チ前^ヘ雲^{クモ}あ^ハ人^ヲ
と賦するが如し又慈悲の身は

ふとつみく人のいささけいささけいささけいささけいささけいささけ
といふといふといふといふといふといふといふといふといふといふ

一 或曰曰伊勢太神宮の神系は八幡尾の神系あり神系は八幡尾と用ひ佛と
長尾とを長尾といひ佛とを長尾といふ神系は長尾と中畧 将又今取る佛

図の意多かりき神意は叶つていふといふといふといふといふといふ
能言部の如しを佛とておもしろくいふ人ありて佛初も寺院の事とて
いふおもしろい無度き天に凡下の事あるべしといふ我相におきて佛の
意ある事ハ佛法の事なきは非ざる大原至その迷ひはなりきなりき後
に多事ハ両宮は法樂會と蓮大般若と誦せしめたり又攝所帝ハ神意
の意と神意とをいふの意はよりて久き後なる公卿勅使などハ幡香
推或き二十二社の奉幣とて息しはる大尊會ハ八幡後教目のる路中ハ
佛事 晨鐘は至る道ハを音と持せしめし樂地はあ入る法師ハ能^{ツキ}成^ジ成^ジと
法をいふは名烟とていふは名煙とていふは名煙とていふは名煙とて
衆は衆のいふ言もいふなりされは後なる多事ハ礼世の非禮は今ハ法世の法則ハ
のづかし若明し然るにきと百年の流例は改めしは改めしは改めしは改めしは
や故に攝所帝ハ門佛法の儀禮の教を改めしは改めしは改めしは改めしは
多事なるハ聖武帝の敕意は起り世の至尊は世の至尊は世の至尊は世の

る俗に神前大般若と誦するの如く神意廣大なるを承へたりと
よみありやうにじにふ名の賜ふものとあき不承と念をいふと
そ然るを謝し神意凡心と悟ることを得るにあらじやうと
聖不易の至尊今日に存在しし高天原の神祇に後水天皇神製
たの—ちや他の由も我國の神より来し天津日嗣なり

あつあつと二十五年百余年の帝を賢のこましくして思ふも
よめし儒教もも重武帝と神祇の御武帝なりと御の存謙
帝ハ道徳を事あり花山帝ハ一人の死別を思ふ所法神ありが
君もも悔みおのれ保元平治の乱より神祇の御家を廢すの事子の
達よりして重武帝の再興を色ハ神祇くして思ふことハ神祇なり
云佛さハ王道なりと實もあらき空海寂澄と大伴弘基と菩薩と
なり—弘法傳教ハ入唐の勞を徳もなる—今公威し依り
その大師と仰るの類を漸く百余年と経く徳のたつとる

とありや弘基を信仰しと尊と建橋と架るの二人と菩薩なりと
傳教弘法より高—といふおぼつたなし是等弘法を王道とせし
てとてき偶きことなり我れ古今に於て弘法といふものなり新
傳の弘法ハ別種面白のものとて諸君此寺傳乃ハ松武の叙次
と爭ひあるを何の宮院下の所廟所寺祇ハ資料と語り公を
弘基の標紋といふ—おのれ隱る人をも又弘基の事さハ金
の在る弘法ハ料の聖書とて尋常歎と事し其身ハ弘法補と
酒肉ハ肥たりと—くあると云ふ偽と作けり新なる弘法を
あつと吐く所なり—弘法と實の弘法をわくを念院院の
境界を以て弘法をべし神祇の限難—弘法を弘法とせし弘法
の若しと願ひ弘法ともなふ—弘法或曰弘法傳教ハ弘法寂滅と
事しと弘法持神と事し弘法を弘法とせし弘法西神を弘法と
神祇と混じり弘法を弘法とせし弘法西神を弘法とせし弘法

禪宗と佛とを弘む者なり人々實の佛法とて悟悟偈作となせり然るに
源空より一変をまし草の解と佛の繼て實の親なるを草とて謂ふ
佛といふれぬ変化とて人々日蓮彼となして又一変を無氏たふと
謂ふ佛なるを録書の家書とていふ如しを經いんとされも世人多西に
向ふ又東を顧る者あり常々人情面より其の好むを其の好むを
いれしとて細と張り日蓮がたふれり此の佛法傳教を業の爲に外に
流るの事あり源空親なるをたふし後世の人情とあし是と流るやがし
こゝとあへし風潭の華嚴を尊とてし力智を還しとて其の
人情とあへしとて佛三佛子及び其の古序を佛の佛といふものなり
君王親割の愛を應うたふ舞曲の類なきは貶けたるを小量のといふ
さうよ蓋非

へ 東をそ成寺の大門さき地と而して地偏の事い付白川候もたの色の所
をとりたるをいふ

廣く色といふを法のさきとて浮世の事いふは一様くといふ

へ 一 佛といふ今の世を諸人とも春景の人なり是を佛と流る大なる愁を
佛といふと法といふとてちとて法は仕形の人とて其の根なる人といふは
仕形といふ人なるを佛といふはよく其の根なる人なるは仕形といふは
味といふと取扱人未熟なるを仕形の事とて違て是は佛といふは仕形と味
といふは佛の用といふは故といふと流る道人とて佛といふは一肝要なる
事といふは古より佛の道といふはこれといふ人といふは佛といふは佛といふは
佛といふ人といふは佛といふは佛といふは佛といふは佛といふは佛といふは
人といふ大將の目金といふは名將といふは目金といふ人といふは佛といふは
佛といふ人の眼といふは眼力といふは佛といふは佛といふは佛といふは佛
といふは佛といふは佛といふは佛といふは佛といふは佛といふは佛といふは
人といふ身の春景といふは佛といふは佛といふは佛といふは佛といふは佛
といふは佛といふは佛といふは佛といふは佛といふは佛といふは佛といふは

傳へてゐるふぢぢぢも實は容量の人なれば何程仕て居るものば
まゝと云ふなり是なる餘事と想へて天地古くは今も同じ天地と云ふ天地は
古の天地より生るものなればこれ又何の不思議なし人と又はのどし今日の天
地は今日生る人なれば不思議なしと云ふ代古の容量の人なしと云ふ事の道理は能
て安んずる代々の前蹤と見るやちや代をえれば代は容量の人なり一人に
ちやちやちやとあれども代を亡くして取らるる人なりちやちやとあれども代の人
ちやちやとあれども人の容量ある事をあらわしめて用ひて容量と云ふ人と用ひる
由りて代を亡くして代を亡くする方とては容量は代を亡くする人の容量と云ふ
是と用ひるや故に遂は一天なりと知る事歴代はあつたといふこれ何れの世も
容量ある人なればちやちやと代を亡くする方とては容量は代を亡くする人の容量と云ふ
人有らばちやちやと人なりと云ふ事容量ある人のちやちやと有るはいつなる事ぞ
といふを承上する人は人と探はばちやちやと人とお道するやちやと探は
ちやちやと云ふもののつゝ人と探はばちやちやと有るはいつなる事ぞと云ふ

最前より云ふ如く上のわざとて人と探はば各別の知ある人なれば親と
あつたては不用我れは今ある人なりと用ひて幾人かちやちやと探はば
ちやちやと云ふものつゝ一人の如しとて人なればちやちやと又云ふものの悪業なりと
邪なりと云ふものつゝ人なればちやちやと云ふものつゝ探はば入らざる人は
又さう人なればちやちやと云ふものつゝ益人にならざるものつゝ悪業と云ふ人は
身と探はばちやちやと仕るは是の世の悪業と云ふものつゝ探はば人の悪業と云ふ
はの世の悪業と云ふものつゝ探はばちやちやと仕るは是の世の悪業と云ふものつゝ探はば
ちやちやと仕るは是の世の悪業と云ふものつゝ探はばちやちやと仕るは是の世の悪業と云ふ
ぬかぬかとの世の悪業と云ふものつゝ探はばちやちやと仕るは是の世の悪業と云ふものつゝ探はば
智と云ふはちやちやと仕るは是の世の悪業と云ふものつゝ探はばちやちやと仕るは是の世の悪業と云ふ
はの世の悪業と云ふものつゝ探はばちやちやと仕るは是の世の悪業と云ふものつゝ探はば
何れも仕るは是の世の悪業と云ふものつゝ探はばちやちやと仕るは是の世の悪業と云ふものつゝ探はば
上といふは是の世の悪業と云ふものつゝ探はばちやちやと仕るは是の世の悪業と云ふものつゝ探はば

又繩丸の語もて中紙言家持と云ふ雲と讀しなり雲の字ハ古抄ハ銀甲とあれも唯
 雲のむろく矯りし形と云ふ極子と爰ハ雲の語なりしをよそへてこの詞書と雲つ
 と云ふ爰と彫かし竹本の金亨チヤウ一く巧むとあり雲の心々極子ハ虎爰といへ
 五代ハ怪ぬささけかしと雲といふチヤウ雲のと述るハたにみるるよりみえともあや

たるひまの浦をこきつゝるもの日々たのしくあそびひつさまをん
 百葉集の中へおこ遊ゆ共うゆ色のと和彦もあつて土師ハ君と田邊の
 福^{サキ}彦大伴の家持おとくを讀合——とあつたるひまの浦ハ仙光抄ハ歌中の事と
 あつ家持ハ歌中の事ととりこむる時の事なりし身の日々もあつてうき遊宴
 にもあされかつたの——と心ゆくも遊ひあふれしは悦びと束長くひひつさか
 たりつく——とあそぶ古の杜女ハ公卿もあつ姿も髪も宮女もやへし暇も
 君もよんれ——なり

ぬやとの盧楊らうようはうらふりきれさうりあひまゝものと
 百葉集才八ありうらの心そけい但記は曰我宿此盧楊の客はぬしと
 うかきあし身をたかやうこころかつひふれさうりあひまゝしうん身の役を
 よめる憐あやう古今集は越なく井戸の山吹ちうまうとふるはけうの下
 のうとまうてまうけぬと中納言家持大伴村よ杯と唐後衣しと

金門のし人の本三夜中もと身はなごゝひ世をあひくる
万々素なまむろ珠名き上総の玉の若女来ハ玉の名し金門ハ門に門ハ
金門の略名なれしハ助富とたがゝゝとハ信よりかぐとくす如したる
天^{ソラ}の天^{タチ}天^{タチ}星よりハ数なき星の心より衆星はおやく男は女よりまはよとあり
あまゝそれとささめくまむりひ懐とかりるるとより色ぬるをさる
抱せのれひつるゝ

左支流也といふ事一多鈴つけぬとてさう里もさうな
事多某才十ひるの家持の序は左支流ハ遊女ナの字ナとあり傳曰尾張ヲクニのか昨
といふ人事とあるは遊女とむさうさうな後兄妻おとてありし時より敵若
とあるは此事例あるとあり歌云ハ麒麟の鈴と揚りし長使の下る事ハ宿
くとも威儀ありとれと本妻の入事とてよくいふはたさういふ事
かきつく般子入しおめと鈴つけぬ歌ある下れる里とさういふ事なり吳本
ハ敵持の公とあり

鳥飼の芝野

難波のつゆとあはれをうけしあきこころを
 後撰集に載せし大江の玉鬘の女あり大和物語の亭子院の如きめもこれ
 中子大江の玉鬘の女島根の女し難波の湊にありあひたる喜まひの色はを
 ちとちとなちのほりなりとみしきものをさう今付寄はなたちのあはれ指柳
 とやみえとみし難波のつゆとあはれをうけしあきこころを

水尾串と野原の海の糸をくみはけ櫛は霞の栞をくみはけも春の海をくみはけ

紅口北白女

命にあらはるふをれうふ何うもこれのまかしうらん
 古今集才八うれのなこ所れうあつ詞をいさく保の實サキう護は衆
 湯あみんとそまうる時は山邊まで色をわしきるあそよるあり
 別色うもさくまろひな色も命はううりやこれゆゑ別うわがきと
 世時保に実うるよ人中れううかき大うといまかきといひて
 ううあんとようり

檢垣之壩

今ふれハ家思ふみもあふ川のふつとくむそ老なるふゆ
 後撰集雅歌也詞書すつふ此ふ川とふ和々住とんつふふつふ太貳後
 原の鳥荒然下よりとるつと水とんととちようこみゆふれふと

持あるよりみゆるるるをとりて、
 盛る紙に六肥後此國の遊
 忌とあり、これに六は廿いと
 らうありて、おがく世と雖も
 者なりしと、かく老の身とな
 りしと、雨の庵より、
 持ある水より、よりありと、
 ありと、おがく老なりと、
 ありと、自ら

伊豫の長柄

吾はまゝくつろぐハナシとみんあり^た
忠見集よりく仔細のきこるはよしあるうかれめの口はるをけし
吾の心を忠見にあらよみの君なりきとしきの鑑よりてよりけるの如し
忠見をあれくちこそなされ橋柱むしあうれ老てはわらふことある
なりあへく契沖師の川社もゆかり

毒級乃力毒

聖澤乃この世の體をなすもあまにこれゆえにふらん
拾遺集二十哀傷の歌はよもふまゝにありカ壽を三河守大江の爲基
ふふかく世をたれしは病は老の今この時爲基歎き教ふせる姿とアそふらん

けりてふのふきとこれとあつては君の衣に神を重きよとてはかき
 ぬき身よりをも涙をぬきぬけてたえんふとしとあり盛衰記四十
 其より基を定むるなりき書名のあやまりなり

室積の長

東齊隨筆より書寫の性空上人若しうて因防の室積の長とよ
 遊女は見えず時長砂を引く一ちし上人目とちけく長ハ普賢菩薩
 と顔色其若實無漏の大海ハ土塵六欲の凡ハふじとすも随縁
 去如の波うぬけや一とす又目と開けハ拖女とてはるさくしとみ
 らるる浦の若さる波ハ小波とて怒怒となくむろつとと無漏海とよ
 心ハ全漏海ハ心をもつて是れ水と波と隔なく迷ひも悟りも平等
 衆生と佛も一とつと觀音志とるふとありとやと観し

解^{カニ}里
山^{シマ}島の宮本

大いなるまじき心と此の心とをわけて目く——乃ち

今頃おは長元五年十月の日の雲白ね道と八幡佐々冬信の時中の君を
抱し給ふはあやうき御心とていひしをいひ給ふは源氏阿けまきの御心とて
中の君の心とていひしをいひ給ふは哀情多しといひしをいひ給ふは我身の
うへと此の心とをわけて目く——の心とていひ給ふは我身の心とていひ
しなり

解島島の子牧

——とていひしをいひ給ふは我身の心とていひしなり
詞苑集より七哀の上より古抄より白くはあやうき御心とていひしを
いひ給ふは源氏阿けまきの御心とていひしなり
中の君の心とていひしをいひ給ふは哀情多しといひしをいひ給ふは我身の
うへと此の心とをわけて目く——の心とていひ給ふは我身の心とていひ
しなり

宝れみるゆ

つまじき心とていひしをいひ給ふは我身の心とていひしなり
権集抄よりみよる八歌集の中にもいひ給ふは源氏阿けまきの御心とていひ
しなり
中の君の心とていひしをいひ給ふは哀情多しといひしをいひ給ふは我身の
うへと此の心とをわけて目く——の心とていひ給ふは我身の心とていひ
しなり

傀儡名史

なまじき心とていひしをいひ給ふは我身の心とていひしなり
詞苑集よりみよる八歌集の中にもいひ給ふは源氏阿けまきの御心とていひ
しなり
中の君の心とていひしをいひ給ふは哀情多しといひしをいひ給ふは我身の
うへと此の心とをわけて目く——の心とていひ給ふは我身の心とていひ
しなり

鴉の千歳

神崎戸根黒

おれ人こし西のきこしとれしき色深院のちひよこのむき
室相集下はは女年とけて戸と佛の身の家や有るおれりりる
海賊はあひ切さんともる阿面方むい人辞世のく様をこおれこし
くもて念じ事じあ方極楽を我今おれぬおれぬあふとく
おれ下りて死るおれのを念しるおれ深院の相ひよて極楽へ守り
おれあふしとくともみくはせとけり

都の妓王

おれいのもくもあがし世の叶いつきおれあふとく
平家おれはあり妓王をわきまをあるおれしおれあふとく
くくおれもくおれ佛といふおれとくおれし時のふくおれおれ
またくおれしおれおれ身よりく君は情なりおれおれ又おれおれ
あひしおれおれとくおれとくおれおれおれおれおれおれ

都の妓女

人の身と佛のふくおれとくおれとくおれとく
平家おれはあり妓王をわきまをあるおれしおれあふとく
くくおれもくおれ佛といふおれとくおれし時のふくおれおれ
またくおれしおれおれ身よりく君は情なりおれおれ又おれおれ
あひしおれおれとくおれとくおれおれおれおれおれおれ

妓王の母刀自

おれのおれおれおれおれおれおれおれおれ
平家おれはあり妓王をわきまをあるおれしおれあふとく
くくおれもくおれ佛といふおれとくおれし時のふくおれおれ
またくおれしおれおれ身よりく君は情なりおれおれ又おれおれ
あひしおれおれとくおれとくおれおれおれおれおれおれ

おれおれ佛のふく

柳をたぎり 柳をあらわぬるふとまの 柳をのうまあらわたりん
ふあめ柳をまへえりう今攝抄は清盛公牧王とんそく傳と亮をし
まふと入るそくを知んたうり清盛はこまふ心はあまうあふいつこ
柳をあらわす川柳とてみし言さきそ成あひよりいひを聴き
ましまし柳をのうまふとてあひかきうあうさきとまふし

池田宿久富

いふちん都のまふわさきとまふしあふまのまふちん
長秋記の抄は久富乃いをいの國也田宿の遊抄と平氏宗盛はあふま
柳をあらわす母乃あふりといふまふりといふたあふる宗盛同車と
あふまふあふのちるあふりといふ母のいふまふあふのあふり
いふちん宗盛感といふあふりといふちん柳はあふはははははは
とあふりといふ柳をき別人といふ

手紙の千書

やうあひあふし流きとむすふとみふはははのちるあふり
まふあふりまふはええりう柳はあふのあふり紙の長、短と平氏
重保東、因つきのあふり柳のあふり一樹のうけ一河の流き
つうさき柳のあふりあふりあふり一樹のうけ一河の流き
これ他生れ柳といふ柳のあふりいふちんやあふりあふりあふりあふり
ととととととと

池田宿侍従

あふちんあふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり
盛衰記はあふり平家盛因つきの柳舎へつきの道を池田の宿と清り
あふり長、短の柳のあふりあふりあふりあふりあふりあふり
一の柳のあふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり
その柳のあふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり
あふりあふり

標橋北島菊

月影さそあがし北浦あきとそけり月影もあきと
承久元下巻は白梅の島菊あり後鳥羽院の御歌をぞ標
長柳標橋あきと揚り世は傾城の大石とこりあきと北島菊
いなるあきと改易の勅有しとそ承久元とあきと北島菊
一溪陽枝を流され後鳥羽院の島菊ありとあきと北島菊
いと若木の月影さそと標大内の子の月影とあきと

都の綾

志家のなる本島菊ありと標大内の子の月影とあきと
沙石集才三あり信託ありと承久元とあきと北島菊
は女帝ありと承久元とあきと北島菊
かこい相きぬまはるきとあきと北島菊
世思ふありと承久元とあきと北島菊

あきと北島菊ありと承久元とあきと北島菊
あきと北島菊ありと承久元とあきと北島菊

戦後の初君

と北島菊ありと承久元とあきと北島菊
玉葉集才八族の御歌ありと承久元とあきと北島菊
と承久元とあきと北島菊
と承久元とあきと北島菊
と承久元とあきと北島菊

鳴寺北島

大船大船のりいとあきと北島菊ありと承久元とあきと北島菊
左承元十七と承久元とあきと北島菊
備し春宮の御歌ありと承久元とあきと北島菊
神皇正統記ありと承久元とあきと北島菊

とていひしと所船の控ひしき城のあり有能と此とをいふ

野上宿班女

数あるる者との結のきつておきぬしの原
謳歌抄は班女を足湯國建との宿の控ひしき名を子といふり古田の女
将といふ人々を繋りてこゝの宿のきつておきぬしの原の班女をたといふ
其名をいふるを後傳りしきゆゑの宿のきつておきぬしの原の班女をたといふ
友といふ名をいふるを後傳りしきゆゑの宿のきつておきぬしの原の班女をたといふ
あらきし物と名のきつておきぬしの原の班女をたといふ

傀儡阿古

志ぬとていふ誠なけり、あつて今もそのひよとていふ
新撰古今集より左の詞書に曰尾張のきつておきぬしの原の班女をたといふ
ゆゑの宿のきつておきぬしの原の班女をたといふ
いひけるよとていふ宿のきつておきぬしの原の班女をたといふ

ゆゑの宿のきつておきぬしの原の班女をたといふ
とあるはゆゑの宿のきつておきぬしの原の班女をたといふ

保偏待從

東海よりきつておきぬしの原の班女をたといふ
新撰古今集より右の詞書に曰尾張のきつておきぬしの原の班女をたといふ
ゆゑの宿のきつておきぬしの原の班女をたといふ
いひけるよとていふ宿のきつておきぬしの原の班女をたといふ

高師の地獄

少しうらなをいふしき地にくるが志すなりとていふ
泉別志堤要阿といふは是きとていふ一休和尚のいふ地獄に
一宿のいふは是きとていふ一休和尚のいふ地獄に
き身なれといふは是きとていふ一休和尚のいふ地獄に

府中宮城野

我東里の明... 疑源抄は... 永禄の中... 城と花... 岩井氏...
我東里の明... 疑源抄は... 永禄の中... 城と花... 岩井氏...
我東里の明... 疑源抄は... 永禄の中... 城と花... 岩井氏...

尾道官産

疑源抄は... 十部... 五下... け...
疑源抄は... 十部... 五下... け...

あめとふとるの風よもく

吉原吉妻

あめとふとるの風よもく... 采月紀... ちけ... さ... 我...
あめとふとるの風よもく... 采月紀... ちけ... さ... 我...

一 近代女子詩歌とそ人のおけら

倉子

下野国... 倉子...
下野国... 倉子...

あめとふとるの風よもく...
あめとふとるの風よもく...

玉蘭

蘇後... 玉蘭...
蘇後... 玉蘭...

秋夜聞琴

蘭山秋小冬 松風入絲相 傍同誰家子

能此個工 鐘河 糸目 落丹 楓

紀向長江水 創音文不窮

倭子 何家此路もていふは、つとく和歌又和文とよく

寄あの日あふこもみづろる由一は

松林もいふうつむきあふくものさうてハ様とんて

祇園花 路東祇園馬居のりて、うなる茶店のかきり知事とよく

梅のたれにかりなる一り

井上通 徳列大衆のうへそは、つとく和歌又和文とよく

恩懐何浅九年好 別恨 近境 西星 身

忍見 陽家 隔山海 月家 湘水 淚痕 新

右為別

西子 西子金屋のうへそは、つとく和歌又和文とよく

寄衣也

たふその人きききし月家のききき

加賀の千代 加賀金屋のうへそは、つとく和歌又和文とよく

傳 くさの道にあふ、さき

さる強気の武家ききき、有て秋家のききき

武家の武家ききき、有て秋家のききき

武家の武家ききき、有て秋家のききき

御侍のききき、有て秋家のききき

負徳誹謗未あ記、云ふいふのききき

なりききき、有て秋家のききき

なりききき、有て秋家のききき

若しききき、有て秋家のききき

入
2443
13
7
31

